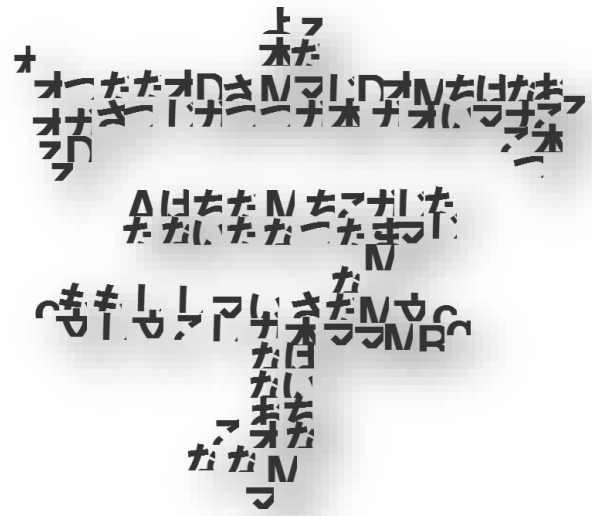




現代には書物だけでなく、看板、標識、洋服のデザインなど、身の回りにはたくさんの文字があふれています。今回の展示ではその『文字』に焦点をあて、言葉として、芸術として、娯楽として…様々な角度から文字にまつわる本を紹介します。

ブランドロゴの秘密

●「フォントのふしぎ ブランドのロゴはなぜ高そうに見えるのか？」

小林 章／著 美術出版社

皆さんのイメージするブランドのロゴってどんなものですか？例えば、速そうでカッコイイ外車のエンブレムの字ってたいいこんな感じだよな、とか、デパートの化粧品売り場に有る高級化粧品のパッケージの文字は大人っぽいな、など、ロゴのデザインと物のイメージは直結しています。なぜでしょう？

『ある特定の雰囲気を持ったフォントを選び出して、その持ち味を生かしながらテーマに合ったアレンジをする。その作業は地味だがすっごい効果を生んでいる』自らの仕事をこう評するフォントデザイナーの著者が、写真270点を使ってフォントの不思議を解き明かします。

没後25年、色あせぬ人気

●「雨の日には……」相田 みつを／著 文化出版局

「にんげんだもの」でおなじみの相田みつを氏。心に染みる言葉を数多く遺していますが、中でも直筆の作品は、独特の書体が魅力をさらに上げています。肩肘張らない気持ちのままのその文字は、相田みつを氏そのものです。

筆を持つと緊張するあなたに

●「教えて先生！くらしの書」齋藤 紫香／著・川口澄子／絵 芸術新聞社

普段は何気なく書いている『文字』ですが、いざ表書きや芳名帳を書こうとすると戸惑ってしまうものですね。

この本では筆記用具による書き味の違いから、暮らしに書をいかすアイテムの紹介まで、初心者向けに分かりやすく説明しています。川口澄子さんによるゆるいイラストも見どころ。筆の精のすみこちゃん・筆仙人と一緒に楽しく学んでいきましょう。

世界の文字を学ぶ

●「図説世界の文字とことば」町田 和彦／編 河出書房新社

現在、世界にはおよそ5000から7000の言語があるといわれていますが、使われている文字の種類ははるかに少なく、その100分の1以下。そして文字の系統はというと、わずか4種類に収められてしまうそうです。その系統ごとに使われている地域や特色を詳しく解説。文字を調べるだけでなく、歴史の本としても楽しめる一冊です。

地道でコツコツ、縁の下の力持ち

●「校正という仕事 文字の森をゆき言葉の海をわたる」

ヴェリタ／編 世界文化社

文字を扱う職業として代表的なものですが、一口で説明するのは難しい。この本のはじめには『人間がいるところに文字があり、文字があるところに校正者がいる。大事な仕事なのだ。』と書かれています。

6人のプロフェッショナルによる職業観や失敗談、Q&Aなど、普段はなかなかふれることのない世界を魅力たっぷりに紹介。コラムも充実し、読み応え充分です。

江戸の庶民と知恵くらべ

●「江戸の判じ絵 これを判じてごろうじろ」岩崎 均史／著 小学館

判じ絵とは、文字や絵にある意味をあてつけて判じさせる（推理して考える）謎解きで、目で見るとなぞとなぞといえる言葉遊びです。物の名前だけでなく、時には地名、時にはしやれを表して、江戸時代に大流行しました。

さて、ガマガエルがお茶を点てている絵は何になるでしょう？